

シリーズ 私の一冊の本

経営情報学部 五島綾子 先生

科学倫理検討委員会編 『科学を志す人びとへ：不正を起こさないために』

閲覧室 2階 407/Ka 16 化学同人 出版

現代は倫理という言葉が氾濫する時代である。しかし倫理とは何であろうか。まず本書の著者の一人の松本三和夫が引用している胸に突き刺さる“倫理とその裁き”の一文を紹介しよう。「50 がらみの羊飼いと 10 歳ばかりの一家の希望の一人息子がいる。ある日、父親の留守に、手負いの逃亡者が助けを求め。男の子は銀貨と引き換えに逃亡者をかくまう。直後、憲兵が差し出す銀時計に誘惑され、逃亡者を引き渡してしまう。この次第を知った父親は、息子に祈りを唱えさせる。そして、銃の引き金をひく」19 世紀フランスの小説家 O. Merimee の小説だ。「裁きをつけた」。泣きすぎる母親に、父親が放つ台詞である。ここでいう倫理とは“人の道”であり、人の道に外れた行いに対して“裁き”をつけたという意味である。しかし、日本学術会議の「科学者の行動規範」によれば、研究倫理とは研究者の仕事の現場を支える最低限のガイドラインであり、仕事によって日常的に鍛えられてゆく性質を持つとする。この点の理解こそがこの書物の肝心な点である。

本書は、2007 年に学術会議の科学倫理検討委員会が編集した著作である。当代一流の異分野の研究者たちが重い課題を苦悩しながら取り組んだ様相が読み取れ、真摯な書物である。本書は“科学的不正を行わないための責任ある研究活動”の前提として、科学を志す若者から教授陣に至るまで“個としての力”を養うことと“異質”を受け入れることを一貫して主張している。

本書の冒頭、黒川清は、今日の日本の学生のひ弱さを台頭しつつある中国の学生と比較して論じている。従来の日本の大学への道は、入学試験の偏差値、どちらかといえば一つの正解への勉強が中心であった。大学は、「なぜかを考える」教育とはいえず、たしかに若者にとって好奇心をかき立てる場ではなかった。若者は、研究者の生き方を日常の指導や研究室の雰囲気、上下関係など日常から学びとるものである。しかし日本の大学は依然として村社会的要素が根強く残り、個人として勝負しているアジアの若者と比べ日本の若者に迫力がないのも無理からぬこととしている。

さらに松本三和夫は昨今の研究倫理の社会背景を科学における競争の視点で鋭く論じている。中でも興味深い点は、論文誌のインパクトファクターやサイテーション数などの素人のための機械的な支援ツールの一人歩きである。これを“科学研究の商業化”という。引用頻度の高い論文が優れた論文という仮説に立つ商業データベースによるランキングが科学研究の質の指標となり、研究予算などが決定され、肝心の専門家が論文を読んで真価を判断するプロセスが抜け落ちていることの指摘である。これが過激な競争と科学不正と関わっているのではないかという問題提起である。そしてこのような事態をもたらした社会背景を正すために、社会と科学者の適正な関係にまで言及している。

最後に本書に引用されているマサチューセッツ工科大学の研究所長の言葉を若者に贈りたい。「似たような価値観の、とてもすぐれた人たちの集まった研究所は、新しいことを生み出す能力に欠ける。最悪だ。いかに多様な価値観の異質な人たちが集まるか、これこそが創造性の高い、すぐれた研究所の条件だ。」

本書は科学を自然科学と限定していない。学問を志す若者に読んで欲しい